

第111回 定期演奏会

PROGRAM

イディッシュ・ラブソディー (約50分)★

Yiddish Rhapsody

— 休 憩 (20分) — Intermission

ベルリオーズ:幻想交響曲 op.14 (約50分)

Hector Berlioz : Symphonie fantastique, op.14

- 第1楽章「夢と情熱」ラルゴーアレグロ・アジタート・エ・アパッショナート・アッサイ
 <Rêveries - Passions> Largo - Allegro agitato e appassionato assai
- 第2楽章「舞踏会」ワルツ:アレグロ・ノン・トロツポ
 <Un Bal> Valse : Allegro non troppo
- 第3楽章「野の情景」アダージョ
 <Scène aux Champs> Adagio
- 第4楽章「断頭台への行進」アレグレット・ノン・トロツポ
 <Marche au Supplice> Allegretto non troppo
- 第5楽章「ワルブルギスの夜の夢」ラルゲットーアレグロ
 <Songe d'une Nuit du Sabbat> Larghetto - Allegro

指揮・芸術監督: 佐渡 裕 Yutaka Sado, Conductor & Artistic Director

ゲ ス ト: シルバ・オクテット&イザベル・ジョルジュ(歌)
 Sirba Octet & Isabelle Georges (★演奏曲)

管 弦 楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2019 1/18(金)・19(土)・20(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:

文化庁文化芸術振興費補助金
 (舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人日本芸術文化振興会これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

飯尾 洋一(音楽ライター)

伝統と革新 パリからの熱風が吹く!

ユダヤの音楽をベースとしてさまざまなアレンジが凝らされた「イディッシュ・ラブソディー」と、フランスの交響曲として屈指の人気を誇るベルリオーズの「幻想交響曲」。一見すると脈絡のなさそうな組合せだが、共通項をくれば、伝統をアップデートするパリ発の音楽ということになるだろう。

「イディッシュ・ラブソディー」はユダヤの音楽をベースとしつつも、さまざまなスタイルの音楽を取り込んで、八重奏とオーケストラ、歌手が共演するというユニークな作品。パリ管弦楽団の腕利きたちが発信するジャンル無用の音楽だ。

一方のベルリオーズはベートーヴェンが築いた交響曲の伝統に、まったく新しい表現を持ち込んだ。それは個人の失恋体験をもとに芸術家の幻覚を描くという、あまりにパーソナルな題材でもあり、音色のパレットを大幅に増やす革新的なオーケストレーションでもあった。その鮮烈さはいまだに色褪せることがない。

必聴POINT

ライター
おすすめ!!

イディッシュ・ラブソディー

《イザベル・ジョルジュの心震わせる歌声》

パリではミュージカル・スターとしても活躍するイザベル・ジョルジュについて、佐渡裕芸術監督は「人の心をつかむ、天才的歌手」と称賛する。言葉を超えて、ハートに訴えかけてくる歌がここにある。

ベルリオーズ:幻想交響曲 op.14

《第3楽章「野の風景」で奏でられる牧歌》

この交響曲のなかでも異彩を放つのが第3楽章。ふたりの羊飼いが舞台上と舞台裏で二重奏を奏でる。なんという寂しげで落ち着かない牧歌だろうか。ティンパニはドロドロと静かに遠来を表現する。自然の描写から孤独が伝わってくる。

PROGRAM NOTE

曲目解説 —
演奏をより深く楽しむために
飯尾 洋一(音楽ライター)



イディッシュ・ラプソディー

初演：2009年6月 ポー(フランス)

情熱と哀愁。ユダヤの伝統音楽を現代風に

今回演奏される「イディッシュ・ラプソディー」は、東欧系のユダヤ人たちの大衆的な音楽であるイディッシュ音楽をベースとしつつ、ジャズやロック、サルサ等、さまざまな音楽の要素を融合させて、多彩なアレンジを施した名曲集。シルバ・オクテットに、歌手でありダンサー、女優としても活躍するイザベル・ジョルジュ、そしてオーケストラが加わるという、ユニークな編成で書かれている。

シルバ・オクテットはイディッシュ音楽のプレーヤーとして知られているが、実はパリ管弦楽団のメンバーを中心に結成されたアンサンブル。高度な演奏技術を生かしながら、ユダヤの音楽が持つ豊かな情熱や哀愁を現代風のスタイルに昇華させている。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、クラリネットといったオーケストラでもおなじみの楽器にピアノとツインバロン※1が加わる。クラリネットとヴァイオリンはイディッシュ音楽に欠かせない楽器。ツインバロンはロマ(ジプシー)の音楽で特徴的な楽器でもある。

はじめて聴く人にとっても、どこか懐かしさを感じさせるメロディが次々と登場する。多くの日本人にとって親近感を覚える音楽なのではないだろうか。

楽器編成

八重奏、独唱、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、サクソ2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、ドラム・セット、シロフォン、グロッケン、ウィンドチャイム、ダラブッカ(ハンドドラム)、サスペンドシンバル、トライアングル、弦楽5部

※1 ツインバロンについては、P20・21に特集を掲載しています。
併せてご覧ください。

コロミーシュカ／歌え、兄弟よ、歌え (伝承音楽)
Kolomishka / Zing bruder zing Traditional

インゲレ・ニット・ヴェイン(坊や泣かないで) (詞：ヤコブ・ヤコブス／曲：アブラハム・エルスタイン)
Yingele nit veyn (Little boy don't cry) TEXT Jacob Jacobs / MUSIC Abraham Ellstein

イディッシュ・チャールストン (伝承音楽)
Yiddish charleston Traditional

ミシルルー (伝承音楽)
Misirlou Traditional

オイ・ヴィヨフ・ティヨフ・ティヨフ (伝承音楽)
Oy, vyoch tyoch tyoch Traditional

ドイナ(哀歌)／カラ・ブレアザ (伝承音楽)
Doina / Ca la Breaza Traditional

マメレ (詞・曲：ミッチェル・パリッシュ、アレクサンダー・オルストーン、オル・グッドハート)
Momele (Mother dear) TEXT & MUSIC Mitchell Parish, Alexander Alstone, Al Goodhart

ケシェネヴァ (詞・曲：ハヴァ・アルベルスタイン)
A Keshenever TEXT & MUSIC Chava Alberstein

素敵あなた (詞：ヤコブ・ヤコブス／曲：ショロム・セクンダ)
Bay mir bistu sheyn (Bei mir bist du schön) TEXT Jacob Jacobs / MUSIC Sholom Secunda

編曲：シリル・レーン

ベルリオーズ: 幻想交響曲 op.14

初演: 1830年12月5日 パリ

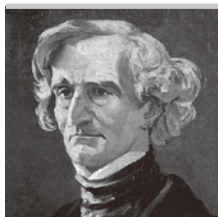
音楽史上初のサイケデリックな交響曲

「音楽史上初のサイケデリックな交響曲」とは、往年の名指揮者であり作曲家のレナード・バーンスタインがこの曲を評して述べた有名な言葉だ。なにしろ、この曲はぶっ飛んでいる。作曲者自身による副題は「ある芸術家の生涯からのエピソード」。といっても、「ある芸術家」のモデルは自分自身。病的なほどに感受性の鋭い芸術家が、失恋してアヘンで服毒自殺を図る。しかしクスリは致死量には至らず、芸術家は奇怪な幻覚を見る。そこで芸術家は恋人を殺してしまい、殺人の罪でギロチンにかけられる……。

驚くべきは、この曲が1830年に書かれているということ。ベートーヴェンが亡くなったわずか3年後、「第九」の初演から数えれば6年後である。ベートーヴェンが「第九」で、自由と博愛を高らかに歌ったその6年後には、ベルリオーズは極彩色の管弦楽法を駆使して、自らの失恋体験とアヘン中毒者の幻覚を描いていたことになる。よもや交響曲という絶対音楽中心のフォーマットで、こんなに赤裸々で危ない個人体験を表現できるなんて！

しかしベルリオーズに交響曲の作曲を決意させたのは、まさにそのベートーヴェンの交響曲体験だった。指揮者フランソワ・アブネックがパリでベートーヴェンの交響曲演奏会を開くと、これを聴いたベルリオーズはオペラなどの声楽曲から器楽曲の分野に向けて関心を広げるようになる。

「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、新たな音楽の世界を開いてくれた」



作曲家プロフィール

エクトール・ベルリオーズ (1803-1869)

Hector Berlioz

作品の直接的な題材となったのは、イギリスの劇団の舞台女優ハリエット・スミッソンへの激しい恋だ。ベルリオーズは「ハムレット」を観劇して、女優スミッソンに理想化されたヒロイン像を見出し、執拗に彼女を追いかけて続けた。だが、想いが満たされないとわかると、作曲家は恋の苦しみを芸術へと昇華させる。奇妙なことに、後年、ベルリオーズはスミッソンと再会して、実際に結婚することに成功するのだが（そしてさらに離婚するという激動のドラマが続く）、「幻想交響曲」の作曲時点では、ベルリオーズにとってスミッソンは高嶺の花だった。

第1楽章 「夢と情熱」

序奏に続き、主部で恋人を表す主題がフルートとヴァイオリンで奏でられる。以後、この主題は形を変えてくりかえし登場する。

第2楽章 「舞踏会」

ハーブが活躍する華やかなワルツ。

第3楽章 「野の情景」

イングリッシュ・ホルンと舞台裏(バンダ)のオーボエが羊飼いの笛の二重奏を吹く。

第4楽章 「断頭台への行進」

恋人を殺した芸術家を待つのはギロチンの刑。

第5楽章 「ワルブルギスの夜*の夢」

魔女の夜宴に醜い姿に変わり果てた恋人がやってくる。吊いの鐘が鳴り「怒りの日」の主題があらわれる。乱痴気騒ぎの末に壮絶なクライマックスへ。

※ワルブルギスの夜：中欧や東欧で4月30日から5月1日の夜に行われる行事。
この夜に魔女が集会を開くと言われている。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2(E♭クラリネット持替)、バスーン4、ホルン4、トランペット4、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ2、ティンパニ2、大太鼓2、シンバル、鐘、タンブリン、ハーブ2、弦楽5部
バンダ: オーボエ

フランスのロマン派を代表する作曲家。生まれはイゼール県ラ・コート＝サンタンダレ。医学を学ぶためにパリに出るが、オペラに出会ったことから、家族の反対を押し切って音楽家への道を歩む。1830年に5度目の挑戦でようやくローマ賞を受賞し、同年代表作となる「幻想交響曲」を初演。オペラでの失敗もあってフランス国内では不遇に終わるが、主に外国で名声を高めた。色彩的な管弦楽法を活用し、伝統にとらわれない斬新な作品を生み出した。